タケダ・ウェルビーイング・プログラム 2015
成果報告レポート

助成番号　15-1-3

ﾌﾟﾛｼﾞｪｸﾄ名	ホスピタル・プレイによる在宅支援システムの構築
団 体 名	特定非営利活動法人ホスピタル・プレイ協会 すべての子どもの遊びと支援を考える会
所 在 地	静岡県
助 成 額	200 万円
設 立 年	2010 年
U　R　L	http://hps-japan.net/

（団体について）

ホスピタル・プレイ・スペシャリスト(HPS) は、遊びの力を用いて、病気の子どもたち、障がいのある子どもたち、そしてきょうだい、家族を支える専門職です。1960 年代に英国で誕生した HPS は、日本では 2007 年から文部科学省の委託を受け静岡県立大学短期大学部で養成教育事業が始まりました。現在では静岡県立大学短期大学部で HPS 養成講座と HPS 養成週末講座が開講されています（文部科学省　職業実践力育成プログラムおよび厚生労働省　教育給付金制度に認定）。2016 年度末現在、161 名の日本生まれの HPS が誕生しています。

私たち HPS は、医療的ケアを必要とする子どもたちすべての命の輝きと可能性を外に向かって発信できるよう、遊びを用いて支援を行います。言葉を持たない子どもも、どこか体が不自由な子どもも、常に医療機器を必要とする子どもも、限られた命の子どもも、劣悪な環境の中で育った子どもも、みんな同じ子どもであり、すべての子どもがそうであるように、遊びを通して学び、成長し、個性を形成し、生きる喜びを覚えます。

すべての子どもが、遊びという必要不可欠な活動にアクセスできるよう、これからも小児医療、児童福祉にかかわるみなさんや地域のみなさんと共に取り組んでいきたいと考えています。

（助成による活動と成果）

今回の助成では、医療的ケアや介護ではなく、在宅の医療的ケア児に遊びを届ける支援を通して、子どもの遊ぶ権利を保障するとともに、家族に病児としてのわが子ではなく、子どもとしてのわが子に出会ってもらうため、ホスピタル・プレイによる在宅支援システムの構築を目指すことを目的として、①助成事業遂行のためのワーキングチームを立ち上げ、②HPS 7 名による 12 名の子どもを対象にしたホスピタル・プレイの実施、③英国から在宅支援を行う HPS をシンポジウム講師兼在宅支援スーパーバイザーとして招へい、④日本での在宅支援の現状と子どもや家族のニーズ調査、⑤英国における在宅支援の先進事例の調査に取り組みました。

成果としては次のことが挙げられます。

①ではワーキングメンバーによる会議を計５回開催し、活発な意見交換ができました。会議やメーリングリストでのやりとりからもメンバー間の協力が図られ、各メンバーの責任のもと役割を遂行することができました。その結果、子どもに関する情報の共有や在宅におけるホスピタル・プレイの必要性に対する認識を深めることができました。②ではホスピタル・プレイを在宅支援に届ける取り組みにおいては、これまで考えもしなかった遊び方や遊びが子どもに届

けられ、子どもの成長を促すだけではなく、家族は新たな子どもの側面を発見することができました。在宅支援にかかわる HPS に求められる知識や技術に対する理解も深まったので、その成果を在宅医療にかかわるその他の専門職と共有し、チームとしての働きかけの向上を図りたいと思います。③では英国から在宅支援を行う HPS を招へいし、開催したシンポジウムでは医師、看護師、理学療法士、作業療法士など多職種による 68 名の参加がありました。在宅支援のスーパーバイズも受け、HPS のスキル向上はもちろんのこと、日本で生活する医療的ケア児の自宅に英国 HPS が訪問し、今でもメールなどでつながりを継続して持っていることは、子どもにとって大きな励みになっているようです。④では国内調査を通して長期に入院生活を送っていた子どもと家族に退院時の在宅支援の移行への支援がなく、社会資源も不足していること、日々の医療的ケアや介護による家族の抱える精神的・肉体的負担の大きさなど、子どもと家族のニーズを把握しました。⑤では英国で在宅支援を専門に行なうプレイ・スペシャリストに同行し、HPS の役割を学び、在宅支援に活かすことにつながりました。
（英国研修報告：http://hps.sub.jp/2016/eikokukensyu.pdf）

（残された課題、新たな課題）

１年間の助成事業を振り返り、HPS による在宅支援は「子どもが親と出会い、親が子どもと出会うための支援」であったように感じています。つまり、これまでの親子関係を構築する際に、医療が子どもの“生”の中心にあったため、医療的ケアの部分にばかり親は目を奪われてしまい、子どもとしての可能性やニーズを発見できずにいるのです。ホスピタル・プレイを介在させることにより、子どもたちは生き生きと自己表現を始め、家族は子どもとしてのわが子に出会えたのです。さらに多くの子どもと家族にホスピタル・プレイを届けるために、なお一層の臨床的な研究が必要であると感じています。HPS による在宅支援を継続し、就学前から思春期の子どもまでの支援を行い、病気や障がいがあっても、１人の子どもとして持っている可能性を社会に向けて発信していきます。そのために、より子どものニーズに合ったリハビリや治療への橋渡しとなる在宅支援システムの目的及び方法を模索していきます。

（活動の背景・社会的課題）（団体からのメッセージ）

高度な医療的ケアを必要とする子どもたちが、医療政策の変更により入院から在宅へと移行されています。在宅で過ごす子どもと親にとって医療的ケアや介護が必要であることはいうまでもありません。しかし、医療的ケア児の子どもとしての部分にしっかりと焦点が当たった支援も必要であるという認識が、まだまだ日本では不足しているように感じます。ホスピタル・プレイを通して医療的ケア児の可能性をどんどんと外に向けて発信し、家族が子どもとしてのわが子を理解できるように支援することによって、結果的によりよい家族関係が構築できるのではないでしょうか。医療的ケア児に遊びを届けるために、HPS の養成もさらに必要となります。在宅における医療的ケア児にホスピタル・プレイを届け、その成果をもって医療的ケアによって守られる生と、遊びによって輝きを放つ生の両方を守る支援が大事だということを、広く社会に伝えていきたいと考えています。

以上